4課

4月27日

真理のために立つ

安息日午後 4月20日

暗唱聖句

そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。（ヨハネ3：14、15、新共同訳）

そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。（ヨハネ3：14、15、口語訳）

今週の聖句

ダニエル7：23～25、黙示録12：6、14、ユダ3、4、黙示録2：10、使徒言行録5：28～32、詩編19：8～12（口語訳19：7～11）、Ⅰヨハネ5：11～13

今週のテーマ

現代のトルコの海沿いの都市イズミルは、聖書の黙示録に登場するかつての都市スミルナでした。人口約10万人のこの古代都市は、1世紀後半から2世紀にかけて繁栄しました。豊かな都市で、ローマに極めて忠実でした。

年に一度、スミルナの全市民はローマの神々に香をたくように命じられました。2世紀のスミルナにも成長するクリスチャン共同体があり、多くの人はそれに従おうとしませんでした。初期の教会指導者ポリュカルポスは、ローマの神々に香をたくことで主を裏切ることを拒んだため、スミルナの広場で火刑に処されて殉教しました。最後にもう一度キリストを否認するように求められたとき、年老いた彼はこう答えました。「86年間神に仕えてきたが、神は私に何も悪いことをなさらなかった。私を救ってくれた神を拒むことができようか」

何世紀にもわたって、男も女もキリストへの信仰を放棄せずに、進んで殉教を経験してきました。彼らの犠牲は、私たちの勇気を再び燃え立たせ、キリストに献身した彼らの物語は、私たちの献身を新たにします。今週私たちは、ポリュカルポスを殺したのと同じ権力であるローマ、現状ではローマ教皇から命を狙われようと、主に忠実であろうとしたワルド派の人々や、後世のフスやヒエロニムスなどの改革者たちを突き動かした聖書の原則を見ていきます。

日曜日　4月21日　迫害されても勝利する

問1　ダニエル7：23～25と黙示録12：6、14を読んでください。これらの箇所では、預言的にどんな時代が言及されていますか。

神の民が神に忠実であり続けるとき、いつでもサタンは激怒します。迫害がしばしば起こります。預言者ダニエルは、彼にとってはまだ未来のことですが、中世の教会が神の民と「闘（い）」、彼らを「悩ます」ようになる時代を描写しました（ダニ7：21、25）。預言者ヨハネは、この同じ時期を、神の教会が荒れ野に逃げ込まざるをえなくなり、そこで「一年、その後二年、またその後半年の間、養われる」（黙12：14）時であると描写しています。黙示録12：6には、「女〔教会〕は荒れ野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった」とあります。神の民は荒れ野で養われました。この長く暗い教皇支配の時代に大争闘が激化する中、ヨハネの言葉は彼らを力づけ、支えたのです。

神の民は、「神の用意された場所」を見つけました。人生最大の試練において、神はご自分に忠実に従う者たちのために、いつも場所を用意してくださいます。最大の試練のときに、神の民は神の愛と配慮の中に避けどころを見いだしてきました（詩編46編参照）。

黙示録12：6、14の「千二百六十日」と「一年、その後二年、またその後半年の間」は、どちらも同じ期間を指しています（3.5年×360日／年＝1260日）。聖書の預言はしばしば象徴で書かれおり、ダニエル書と黙示録の預言的な部分では、預言的な1日は文字どおりの1年に相当するのです。民数記14：34やエゼキエル4：6にも、「1日＝1年の原則」が見られます。

この原則は、これら二つの聖句だけでなく、聖書の幅広い土台の上に成り立っています。年代学者であり、旧約聖書学者でもあるウィリアム・シェイ博士は、旧約聖書全体を通して、この原則を裏づける23行の聖書的証拠を示しています。聖書注解者たちは、何世紀にもわたってこれを用いてきました。

西ゴート族、バンダル族、オストロゴート族は、ローマの公式の教えとは異なる教義を信じていた部族です。1260日は、これらの蛮族の最後の一族であるオストロゴート族が西暦538年にローマから追い出されたときに始まりました。この霊的暗黒時代は、1798年、ナポレオンの将軍ベルティエがローマから教皇を追い出すまで続きました。この長い期間、神の言葉に従ったがゆえに、無数のクリスチャンが殉教しました。死んだとしても、彼らは勝利しました。キリストにあって、罪悪感と罪の支配から解放され、「小羊の血によって」勝ったのです。十字架上でのサタンに対するキリストの勝利は、彼らの勝利でした。

問2　ユダ3、4を読んでください。ここではどんなことが警告されていますか。その警告は、後世のキリスト教会にどのように適用されましたか。

ユダの手紙は、「父である神に愛され、イエス・キリストに守られている」（ユダ1）忠実なクリスチャンたちに向けて、紀元65年以前の、ある時期に書かれました。これらの忠実なクリスチャンたちは、「聖なる者たちに一度伝えられた信仰のために戦うことを、勧め」られなければなりませんでした。なぜなら、ある者たちが、「ひそかに紛れ込んで来て、わたしたちの神の恵みをみだらな楽しみに変え……ているからです」（ユダ3、4）。この戒めは、異教の習慣が教会に流れ込み、人間の言い伝えが神の言葉を損なった中世の信者たちにとって、より大きな意味を持ちました。何世紀もの間、ワルド派のような人々が聖書の真理を守る擁護者として立ってきました。彼らは、キリストが唯一の仲保者であり、聖書が唯一の権威の源であると信じていたのです。「どの時代にも神の証人がいた。キリストを神と人間との間の唯一の仲保者として信じ、人生の唯一の規準として聖書を受け入れ、そして真の安息日を尊んだ人々がいたのである」（『希望への光』1617ページ、『各時代の大争闘』第4章）。

問3　黙示録2：10を読んでください。死に直面しても神に忠実である者たちに、神はどんな約束を与えておられますか。

この言葉は、スミルナの教会に向けて書かれたものです。この町の守護神の一つが、祝祭と豊穣の神ディオニューソスでした。ディオニューソス神殿の司祭たちが死ぬと、葬列の中で彼らの頭に冠がかぶせられました。ヨハネは、死に際して頭に載せられるこの地上の冠と、悪の勢力に勝利した者の頭に載せられる命の冠とを対比させています。命の冠は、キリストのために試練、困難、苦しみ、死さえも耐え忍んだ者たちに贈られます。

命の冠は、これらの忠実な信者たちに、キリストのために死さえも耐え忍ぶよう促し、困難な状況にある信者たちをいつも突き動かします。命の冠は、苦痛と迫害の中にあったワルド派の人々を奮い立たせました。彼らは、いつかイエスに会い、永遠に彼と共に生きられることを知っていました。命の冠は、私たちにも語りかけます。私たちは今、試練の中にいるかもしれませんが、イエスから目を離さなければ、命の冠が待っています。

問4　使徒言行録5：28～32、エフェソ6：10～12、黙示録3：11を比較してください。これらの聖句には、どんな基本原則がありますか。

ワルド派の人々や宗教改革者1人ひとりの際立った特徴の一つは、神への絶対的な忠誠、聖書の権威への従順、そして教皇の至上権ではなく、キリストの至上権への献身でした。彼らの心は、新約聖書の信仰と勇気の物語で満たされていました。

彼らはペトロや使徒たちと共に、「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（使徒5：29）と言うことができました。彼らは、「主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい」（エフェ6：10）というパウロの勧告を理解していたのです。「あなたの栄冠をだれにも奪われないように、持っているものを固く守りなさい」（黙示録3：11）というイエスの忠告も真剣に受け止めました。信仰に堅固なこれらの男女は、ローマ教会の言い伝えに従うのではなく、神の言葉の真理を擁護する勇気を持っていました。

ワルド派は、自分たちの言語に訳された聖書を手に入れた最初のグループの一つです。ワルド派の聖書写本家ジャン・レジェが書いた彼らの写本に関する感動的な記録には、絵も含めた彼らの仕事に関する実体験に基づく情報が含まれています。ワルド派の人々は、北イタリアや南フランスの山岳地帯の共同体で密かに聖書を写しました。若者は幼い頃から、聖書の大部分を暗記するように親から指導され、聖書の写本家のチームが協力し合い、苦労して聖書を写しました。ワルド派の若者たちの多くは、商人としてヨーロッパ中を旅し、聖書の真理を密かに伝え、ある者は大学に入学し、機会があれば、聖書の一部を学生仲間に伝えました。聖霊の導きにより、彼らは、誠実な求道者に受容性があると感じた適切な瞬間に、貴重な聖句の一部を選んで与えたのでした。彼らの多くが、忠誠と献身の代償として命を失いました。ワルド派の人々は、聖書のすべての教えを明確に理解していたわけではありませんが、ほかの人々と分かち合うことによって、神の言葉の真理を何世紀にもわたって守り続けました。

「神に従う人の道は輝き出る光／進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる」（箴言4：18）。ソロモンは、神がご自分の子らを導く道を、ますます高く昇る太陽にたとえています。もし神が単に宇宙のスイッチをお入れになり、太陽が瞬時に輝き出したとしたら、私たちの目は見えなくなってしまうでしょう。暗闇が何世紀にもわたってこの世を覆ったあとに、神は、御言葉に献身し、さらなる探求を続ける男女を起こされたのです。

問5　詩編19：8～12（口語訳19：7～11）、119：140、162、エレミヤ15：16を読んでください。ダビデとエレミヤは、宗教改革の礎となった神の言葉に対して、どのような同様の態度をとりましたか。

宗教改革者たちはみな、神の言葉を「喜び」ました。彼らは神の御心を行うことを「喜び」、神の律法を「愛し」ました。宗教改革の最も重要な基礎的真理の一つは、聖書を学ぶことがもたらす喜びでした。聖書研究は骨の折れる仕事ではなく、律法主義的な訓練でもありませんでした。それは厳しい要求などではなく、喜びでした。

聖書を学ぶとき、彼らは聖霊の力によって変えられました。「ウィクリフの品性は、聖書が人を教え、改変する力を持っている証拠である。聖書が彼をこのような人物にしたのである。啓示された偉大な真理を把握しようとする努力は、すべての機能をはつらつとさせ、活気づける。……聖書の研究は、他のどんな研究よりも、あらゆる思想と感情と抱負とを高尚にする。また、確固とした目的と忍耐、勇気を与えるとともに、品性を洗練し、魂を清める。畏敬の念をもって聖書を熱心に研究するとき、学ぶ者の心は直接神の無限の心と接触することができ、どんな人間的哲学を修めても達することができないような高潔な原則を持つとともに、強く活発な知性を持った人々を世に提供することができる」（『希望への光』1633ページ、『各時代の大争闘』第5章）。

問6　IIテモテ2：1～3を読んでください。使徒パウロはテモテに、神の言葉を伝えることについて、どんな勧告を与えましたか。

神の言葉の真理とキリストによる救いの喜びが宗教改革者たちの心を満たしたので、彼らはそれを伝えずにはいられませんでした。ウィクリフは、神の言葉を英語に翻訳することに生涯を費やしましたが、その理由は二つでした。生きているキリストが御言葉を通して彼を変えられたこと、そしてキリストの愛が彼の学んだことをほかの人に分かち合う動機を与えたことです。

ウィクリフはローマに捕まる前に死にましたが、教皇庁は彼の遺骨を掘り起こして焼き、その灰を川に投げ捨てました。しかし、その灰が水によって散らされたように、命の水である神の言葉は、神の働きによって広がっていきました。このようにして神は、「宗教改革の明星」である彼を用いられました。

問7　ヘブライ2：14、15を読んでください。中世の信者たちは、大争闘の現実をどのように体験しましたか。

恐ろしい迫害に直面した忠実なワルド派の人々を励ましたものは、何だったのでしょうか。フスとヒエロニムス、ティンダル、ラティマー、そして中世の殉教者たちに、炎や剣に立ち向かう勇気を与えたものは、何だったのでしょうか。それは、神の約束に対する信仰です。彼らは、「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」（ヨハ14：19）というキリストの約束を信じたのです。彼らは、キリストの強さが人生最大の試練を耐えるのに十分であると気づき、苦しみの中でキリストと交わることによって喜びさえ見いだしたのです。そして彼らの忠実さは、世界に対する力強い証となりました。

彼らは、過去の先にある未来に目を向け、キリストの復活によって死が敗北した敵であることを知りました。この勇気ある男女にとって、死の支配は打ち砕かれました。彼らは神の言葉の約束にしがみつき、勝利を得たのでした。

問8　ヨハネ5：24、11：25、26、Ⅰヨハネ5：11～13を読んでください。これらの約束は、あなたにどんな個人的確信を与えてくれますか。また、人生の試練において、私たちをいかに助けてくれますか。

ヤン・フスは、投獄、不正、死に直面しても、くじけませんでした。彼は何か月も牢獄で苦しみました。寒く湿った環境のために発熱し、命を落としそうになりました。それでも、「神の恵みが彼を支えた。最後の宣告を下される前の苦難の数週間にわたって、天からの平安が彼の心を満たした。彼は友人にこう書いている。『わたしはこの手紙を牢獄の中で、そしてつながれた手で書いている。明日死の宣告を受けることを予期しつつ。……イエス・キリストの助けによって、われわれが、ふたたび、来世の快い平和のうちに再会するときに、神がどんなに恵み深く、ご自身をわたしにあらわされたか、また、誘惑と試練のただ中にあって、どんなに力強くわたしを支えてくださったかを、あなたは知ることであろう』」（『希望への光』1640ページ、『各時代の大争闘』第6章）。

パウロの訓戒は、私たちに語りかけています。「約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」（ヘブ10：23）。神の約束は、今日も私たちを支えています。

金曜日　4月26日　さらなる研究

参考資料として、『各時代の大争闘』第4章「真理の擁護者たち」、第5章「改革の明星ウィクリフ」、第6章「殉教者フスとヒエロニムス」を読んでください。

「神は、これら選ばれた人々の心に大きな光を与え、ローマの誤りの多くをお示しになった。しかし彼らは、世に示すべき光を全部受けたのではなかった。これらご自分のしもべたちによって、神は人々をローマ教の暗黒から導き出しておられたのである。しかし、彼らは、さまざまの大きな障害に直面しなければならなかった。神は、彼らが耐えられるだけ、1歩ずつ、お導きになった。彼らはすべての光を一時に受ける用意がなかった。長い間暗黒の中にいたものが、真昼の太陽の輝きを受けるのと同じように、もしすべての光が一度に示されたならば彼らは目をそむけたに違いない。それゆえに神は、人々に受け入れられるだけの程度に従って、少しずつ光を指導者たちに示されたのである。世紀を追って、他の忠実な働き人たちが現れ、人々をなおいっそう、改革の道に導いた」(『希望への光』1637ページ、『各時代の大争闘』第6章)。

「フスは、福音の使徒となったある司祭に送ったもう一つの手紙の中で、きわめて謙虚に自分自身の誤りについて語り、自分は『美服をまとうことに喜びを感じ、軽薄なことに時を浪費していた』と自分を責めている。そして、次のような感動的な勧告をつけ加えた。『あなたは、聖職や財産の所有ではなくて、神の栄光と魂の救いを考えるようにせよ。自分の魂以上にあなたの家を飾らぬように注意せよ。何よりも徳を高めることに留意せよ。貧者には、敬虔(けいけん)と謙そんをもって接し、あなたの財産をぜいたくな宴会のために浪費してはならない。もしあなたが生活を改めず、ぜいたくをやめなければ、わたしが今懲らしめられているように、あなたはきびしく懲らしめられるであろう』」(『希望への光』1639ページ、『各時代の大争闘』第6章)。

話し合いのための質問

❶「漸進的な光」とは、どのようなものですか。なぜ神は真理を徐々に明らかにされるのでしょうか。この原則は、今日の教会にどう当てはまりますか。

❷ あなたがどこに住んでいようと、その地域の文化には、聖書が教えていることと何らかの形で対立する価値観、考え方、道徳規範があります。私たちは、どのようにして善良な市民であり続けると同時に、その地域の文化が主張する歪んだ価値観に屈しないようにすることができるでしょうか。